

平成17年
11月号

250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



ワラア(自制)

ハイルニサ川島恵美子さんへのインタビュー

ゴミ箱と花嫁のへや

遠い未来についての言及

み使いの息子たち

今年のラマダンで考えたこと

「シザーハンズ」 Edward Scissorhands

遊離基(フリーラジカル)

「秋は恵みの季節であり、「祭りのあと」を感じさせる落ち着きと静けさの季節でもある。そしてあの大理石の子供たちもまた、秋と、秋の終わりを思い起こさせた。繊細に施された浮き彫りは、それが経てきた数千年という時間を通し、「この浮き彫りの周囲、あるいは浮き彫りが埋まっていた上の土地での様々な栄枯盛衰、「おこれる者久しからず」というような事実、人間のはかなさと共に、人類がずっと抱いてきたであろう創造主への思慕、神への模索を思い起こさせた。」p.288



朝晩は肌寒く感じる季節となりました。毛布一枚では寒くて夜中に目が覚めることもあります。就寝中にしばしば布団をはいでしまう子供は、寝冷えのせいかすぐ風邪気味になってしまいます。

このラマダーン中、そんな「寒さ」を感じたり断食を解いて食事をしたりするごとに、パキスタン地震に見舞われた被災者のことが頭をかすめました。私には雨風を避け疲れた体をゆっくり癒せる家がある。日没になれば温かい飲み物や食べ物を十分にいただいて体にエネルギーを供給することもできる。一日の垢を洗い流してサッパリと気持ちよくしてくれる温かいお風呂もある。しかし被災者の方たちは一体どうしているのだろうか・・・と。

大災害が発生した時には人間の無力さを思い知らされるのですが、今回の地震では厳しい冬が迫っているにも関わらず支援不足による被害の拡大が懸念されており、さらにそれを強く見せ付けられているように感じます。様々なものを消滅させていく冬を目の前にして避けることも太刀打ちすることもできない人間の姿。被災地から離れたこの日本に住む私たちにも、人間はどのような形であれいつか消滅させられる存在であることを直視し、それから逃げることなく何をすべきかに気付かなければならないというメッセージが示唆されているのかもしれない。

被災者の方々がこの試練を忍耐のうちに過ごされますように、そして支援がいち早く届くよう祈ります。



編集部より	2
文学	3
祈りのある毎日へ	5
マッシュポテト	5
ワラア（自制）	6
ハイルニサ川島恵美子さんへのインタビュー	8
ゴミ箱と花嫁のへや	10
遠い未来についての言及	13
ご病気の方々へのメッセージ	15
み使いの息子たち	16
今年のラマダーンで考えたこと	17
「シザーハンズ」 Edward Scissorhands	18
遊離基（フリーラジカル）	20
カレッジの小石～ちいさなわたしの、オクスフォード旅行記 ～最終回	22
読者からのメッセージ	27





文学は、一つの民族の精神のあり方、思考世界、文化生活をはっきりと示すものです。同じ精神構造、同じ思考システム、同じ知的生活を共有できない人々は、同じ民族に属していたとしても、お互いを理解することができないのです。

言葉は、思想が一つの頭から他の頭へ、一つの魂から他の魂へと移行する上で最も重要な媒介となります。この媒介をうまく利用できる人々は、魂で発酵させた思想に、非常に短時間でそれを表現するものを見つけ出します。そしてその思考と共に、その人は不滅となります。その能力を持たない人々は、生涯を通して味わった思考の苦しみと共に、何の痕跡も残さずに消えていくのです。

それぞれの文学は、用いられている材料の違い、秘められた意図の特性などによって、それぞれ独自の語り的手段であり、またその種類に固有の言葉となります。みんな、この言葉を少しずつ理解してはいますが、その言葉を真の意味で使い、それを使って語っているのは、詩人や文学者たちのみです。

金や銀を両替商たちが理解するように、言葉の値打ちも、言葉の宝石商たちのみが理解します。地に落ちた花を、動物は口に入れ、嘔み潰してしまいます。その価値を理解することなく、それを踏んでいてしまいます。人間たちは、その花の香りをかぎ、それを胸に飾るのです。

崇高な思想、崇高な概念は、必ず、人々に影響を与え、彼らの心に興奮を起こさせ、魂が受け入れられるような崇高な形でとかれなければなりません。そうでなければ、言葉にこだわる人々が、それにある破れや、つぎはぎを見て、その中に包まれた宝石を価値のないものと見てしまうからです。

文学がなかったとしたら、知はその壮麗な地位を得ることはなかったし、哲学も現在まで生き残らなかったし、評論も、それが負わされた期待に応えることもできなかったでしょう。

文学者や詩人たちは、内面、外面世界において目にし、感じた美しいものを語る、笛吹きに似ています。人々は彼らを媒介として、多くのメンバーを含む合唱団から響く歌声の、意味と本質を理解するのです。そうでなければ、感情という道から来て、彼らの魂を包みこむ炎に気がつかない人々が、笛や、笛から響く声に気がつくのは不可能であるからです。

その源が澄みきっていて、混じりけのないものであれば、全ての芸術分野、全ての芸術作品は、それぞれに異なる季節のそれぞれに異なる美、それぞれの季節の花や果実、それぞれの味や香りを表しているという観点から、ほとんど全てのものは美しく、きれいで、素敵なのです。

文学も、ちょうど他の芸術分野と同様、感覚、物事による完成化、意図、時間を超越した状態、味わいによって、不滅へと至ります。だから、芸術家は、目に見え、感じられる物事を超越し、向こう側から吹いてくる風に、心を備え、開くことがとても重要なのです。

意図されたことが語られる際には、韻を踏んだもの、散文などそれぞれの言葉が、思想のきらめきに適したものである必要があります。それを妨害してはいけなく、それを覆って影をつくってもいけないのです。それが価値ある石であったとしても、内容や意図、目標とするものを覆ってしまった場合は、それに比較して、言葉の影響力や感動は失われ、そしてそうってしまった言葉は、長く生き続けることができないのです。

言語は、一つの思想、一つの概念を語る媒介であると同時に、芸術、美、礼儀というテーマにも深い結びつきを持つものです。文学という言葉は、この側面を示すものでしょう。

文学の本質はそこに秘められた意味です。だから、語られる言葉は簡潔で、かつ豊かで意味深いものであることが大切です。この点を、一部の人々は、先人が用いた比喩、言い換え、暗示、ほのめかし、地口のような言葉や意味の芸術を用いて語ってきました。しかし私の考えでは、最も深い言葉は、インスピレーションに興奮を覚える魂に、被造物を包み込みつつ、心に定着させる想像、この世とあの世を、一つの真実の二つの側面のように学び探求していくことのできる、信仰をもつ頭脳に求められるべきなのです。

この世界に、異なる文明、文化が存在するように、異なる文学の種類が存在するのは当然のことです。それは、魂における品位、美への愛情、自然という書物についての方向付け、旋律によって、多くの顔を持っているようでいて、かつ一つの完全体であり、普遍的なものです。

異なる文化、文明の苗木畑で育ち、成長した、古い時代の詩集は、一部の人々によって難解で意味のないもののように見られるかもしれませんが、そのように受け止められてしまうのは、私たちの視野の狭さが原因だと見るべきです。聖なる書やスナナの、天空からのスペクトルのもとで、かなたからもたらされる光を、限りなく携えていこうと決意した勇者たちの、活力に満ちた心、世界を新たに形作っていこうという意志で高められた魂によって作り上げられた文学を、活力のない時代の、命を持たない体が理解することが、どうして可能となるのでしょうか。

全ての真実は、まず人の魂に、真髓という形で現れます。それからそれが感じられます。そして、言葉によって、ペンによって、槌によって命を与えられ、結晶化されます。そして、少しずつ少しずつ、芸術作品の表面で、あるいは芸術作品として、表現されるべく努力がなされます。このような作品が時空を超越する次元に到達するかどうかは、信仰、そしてその信仰における愛情のあり方にかかってくるものなのです。

時に、同じ地域、同じ国の人々の間においてさえ、文学の表現や流れが全く異なる場合があります。外面的なこの違いは、物事、出来事への見方が違うこともその原因ですが、もう一つ、信仰やその他価値あるものを認めるかどうか、というところから生じています。山の頂きにいる人にとっては、谷底にいる人の旋律が意味を成さないつづやきでしかないように、谷底にいる人にとっては、山の頂上にいる人の言葉も、そのようなつづやきでしかないのです。

よい芸術作品は、それを作り出す要素の完全さと、また要素の完全さも、それらが形成している全体の完全さと、密接なつながりを持ちます。真髓が確かなものでないところに穢れない感情が生まれること、穢れない感情のないところに、ずっと命を保つことのできる、燃えるような、熱い表現が生まれることも、ありえないことなのです。

芸術家と同様、文学者たちもまた、この世界の真の色彩、形、ラインにおいて、常に自身に特有の物を求めています。それを見つけ、表現できた時、彼は筆を折り、刷毛を投げ捨て、驚きと感動のうちに我を忘れるのです。だから、最も偉大な芸術家は、熟考し、感じつつ生きるしもべたちの中に見出されるべきなのです。



不安を取り除くお方よ

悲嘆を取り除くお方よ

つみびとを赦し給うお方よ

悔い改める者達を受け入れるお方よ

創造なさるお方よ

約束を守られるお方よ

乳のみ児達に糧を与え給うお方よ

約束を果たすお方よ

神秘を知り尽くすお方よ

種子を芽吹かせるお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。¹



マッシュポテト

材料： ジャガイモ 5～6個

塩 少々

コショウ 少々

牛乳 100cc-適当に

バター 大さじ1ぐらい

作り方： 1. 鍋にジャガイモを入れ茹でる。

2. 柔らかくなったら熱い間に皮をむく

3. 同じ鍋にジャガイモを入れつぶす

4. 3の中にバター、塩、コショウを入れてつぶしていく

5. 4の中に牛乳を入れる。一柔らかい方が好きな人は牛乳をたくさん入れる。かたい方が好きな人は少なめに

6. 極弱火にしてジャガイモがブツブツしたら出来上がり

¹ 偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌカビール) には、祈願(きがん)、唱念、教いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌカビール) が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



ワラア(自制)

ワラアは自分自身を不適切なものや不必要なものから遠ざけることと定義されています。宗教的に許されていないものや禁止されているものを厳格に避けることや、禁止された行為を犯してしまわないように、疑わしいことをすべて慎むということと同じような意味を持ちます。ワラアの基本は、イスラームの原則「疑わしいと思うものは避け、疑いのないものを好みなさい」や預言者のハディース「何が許されているかは明らかであり、何が禁止されているかもまた明らかである」によって説明されています。

スーフィーの中にはワラアを、イスラームの教義の真実に対する確信や、自分の信仰や行為において率直であること、イスラームの戒律を遵守することにおいて揺るぎなくあること、アッラーとの関係において非常に注意深くあることと定義する人たちがいます。他にも、一瞬たりともアッラーに対して不注意にならないことと定義する人々や、また、永久に自分自身をアッラー以外のものに対して閉ざすことや、アッラー以外のものに対して（何かが必要であるからなどの理由で）自分自身を下げないこと、自分のエゴ、自分自身の世俗的な側面、世俗的欲求、世俗それ自身といったものに惑わされずにアッラーに辿り着くまで前進し続けることと定義する人々もいます。

人々に対し請い願うことは常に避け、

最も寛大な御方アッラーのみに対し請い願いなさい。

この世の華やかさや豪華さを放棄しなさい。

それらはやってきたのと同様、疑いなく去っていくものである。

ワラアはまた、無用で儂い束の間のものの本質を自覚して行動する中で、必要で役に立つものに従事することに自分の人生の基礎をおくことも解釈できます。ハディースでは次のように述べられています。「自分自身にとって無用なものは捨てるというのは、良いムスリムの美しさである。」

バンドネームの著者、ファリド・アル=ディン・アル=アッターはこれを美しく説明しています。

ワラアはアッラーに対する畏れを引き起こす。

ワラアを持たない者は屈辱を受ける者である。

まっすぐにワラアの道に従うものは誰でも、

その行いはすべてアッラーのためのものである。

アッラーの愛と友情を求める者でも、

ワラアを持たなければ、本当に愛を求めていることにはならない。

ワラアは信仰する者の人生と行為の内面と外面の両方に関係します。ワラアの道の旅人は既にタクワの頂点に辿り着いていなければなりません。その人生はシャリーアの命令と禁止を厳格に遵守していることを反映していなくてはならず、その行為はアッラーのためでなければならず、その心や感情からはアッラー以外のものはすべて取り除かれていなければならず、そして“隠された宝物”と共にあることを常に感じていなければならないのです。

言い換えると、その道の旅人は、自分自身をアッラーへと導かない思考や想像は捨て、自分自身にアッラーを思い出させない状況には執着せず、アッラーについてはではない言葉には耳を傾けず、アッラーに喜ばれないことはしないと云えます。そのようなレベルのワラアによって、人は直接素早くアッラーのもとへと辿り着くことができるのです。アッラーは預言者ムーサーに対して言われました。「私の近くに来ることを望む者は、ワラアとズフド（禁欲主義）よりもそのために良い道を見つけることはできていない」

広く人々に知られているワラアは預言者の教友たちに続く世代の人々に目撃され、ほとんどすべての信仰する者の目標となりました。ビシュル・アル＝カフィーの妹がアハマド・イブン・ハンバルに尋ねたのはこの時代のことでした。

おおイマームよ。私はいつも夜に家の屋上で糸を紡いでいます。そのとき、数人の役人たちが灯を持って通りかかり、不本意ながらも、私はその灯の光から利益を得てしまいます。これは宗教的に非合法な方法で得たものを自分の所得に混ぜてしまっていることになりませんか？偉大なイマームはこの質問に対し激しく涙を流し、答えました。このようなほんの些細なことであっても、疑わしいものは、ビシュル・アル＝カフィーの家に入れてはなりません。

禁じられたものに一瞥を投げたことに人々が一生涙を流し続けたのも、禁止されたものの欠片を知らずに食べ、それを吐き出した人が、何日も嘆き悲しみ続けたのもこの時代のことでした。偉大なハディース学者で禁欲主義者のアブドゥッラー・イブン・ムバラクの伝えるところによると、誤って自分のポケットに入れてしまったものをその持ち主に返すためにメルヴ（アフガニスタン）からマッカまで旅をした人がいたと言います。フダイル・イブン・イヤドのように、借りがあると考えた人に対して一生をかけてそれを返し続けた人はたくさんいました。アブー・ヌアイム・アル＝イスファハニによって書かれたヒルヤト・アル＝アウリヤ（信仰深い人々の首飾り）やイマーム・アル＝シャラニによるアル＝タバカ・トル＝クブラ（最も偉大な概論）などの信仰の深い人々の伝記には、このようなワラアの偉人の話がたくさん載っています。





Q：川島さんのお仕事はどのような事をされているのですか？

A：英語・トルコ語の同時通訳・翻訳・映画字幕の仕事をしています。

Q：英語・トルコ語は、どのように学ばれたのですか？

A：英語は高校を卒業した後、「第4期学研オザークス大学留学生」としてアメリカの大学で学びました。卒業後は帰国して、アメリカ系の会社に国際秘書として勤務しその頃から通訳も受けていました。

Q：トルコ語を勉強されたきっかけは何ですか？

A：夫の家族や親戚の方達と理解しあう為です。夫はトルコ人なのですが、暫くは二人の会話は英語でした。しかし、トルコ在住もきっかけとなり、いつも辞書とメモを持ち歩き、判らない単語等をメモし自分で調べていました。3年くらいするとヒアリングは出来るようになりましたが、中々トルコ人言っている意味は解しても自分の言わんとすること全ては言い尽くせるほどにはなりません。が、帰国後半年であるとき突然夫婦間の会話はトルコ語となりました。トルコ人と口論しても私は自分が正しいときには絶対に論破できる自信があります。その後も、「日々精進」を、モットーにゆっくりゆっくり独学の人生を歩んでいまして、今では通訳まで出来るようになりました。

Q：映画の字幕もされているそうですが？

A：以前アニメーションの分野で有名な「東映動画社」で英語・日本語通訳・翻訳を出来る人を募集していたので応募しその会社に勤務しました。そこでは、テレビやアニメ、北米合作映画の製作現場における翻訳や監督やスタッフの通訳、「日本アニメ」の海外合作のための研修通訳及び翻訳をやらせて頂きました。海外の物を日本で合作するだけでなく、日本の映画も海外と合作してやっと、映画化されるのです。

その後、JICAの研修管理員も受けましたし、様々なボランティア等を経て現在は独立して「トルコ語・英語・日本語の通訳翻訳・同時通訳・字幕等」の仕事をしています。

Q：映画字幕は語学が出来ても特に日本語とお互いの文化を良く知らないと難しいと聞いた事があります。

A：字幕は、極力10文字、最長12文字以内に収めるようになっています。何故なら、字幕など画面の目ざわりですから本当は皆無のほうが良いのです。四字熟語等を使用し画面の会話で「・・・と、」発言していても、観て直ぐに内容が理解できるようであれば字幕は、「ええ・・・」くらいにしてあえて表記しません。とても早口で、法律用語等を長々と説明しているところを限られた字幕数に翻訳するのに苦労することも多々あります。そこが、ドキュメンタリーや、ニュースと違う所です。

Q：トルコ映画の字幕をされていると聞きましたが？

A：元々映画の世界に居たので、映画祭に出品されるトルコ映画の挿入歌の訳を頼まれた事がきっかけで、映

画祭に出品するトルコ映画の字幕や国際映画祭での監督の通訳をさせて、頂くようになりました。映画はまず最初に全てがそのままの内容で訳され、その後専門用語の部分はその分野の方が監修します。そして映画字幕となります。

Q：通訳や翻訳で苦勞している事はありますか？

A：記者会見などでの通訳もするので、国と国との文化の違い、映画の背景・歴史、監督が何を訴えたかったのか等理解していなければならないので、それまでの調べ物は膨大な量になります。例えば、映画の中で音楽が使われれば、何故その曲なのか？何故その場面でその曲が必要なのか等自分なりに分析して監督が来日されたときにお尋ねしていると、「あなたのように私の作品を理解分析する日本人がいるなんて夢にも思ってもみなかった。」と、コメントされた時ほど嬉しいことはなく、今までの疲れもそれで吹っ飛びます。異文化の例としては、日本では「ふくろう」は「福を呼ぶ」「学問の神さま」等と良いイメージで使われますが、トルコやイスラム圏では逆のイメージを持たれています。記者会見等では、事前に監督に文化の違いを説明しておく事も良く有ります、でないと通訳は自分の発言は稼動中許されませんので、監督さんにそれを発言していただかないと観衆の皆様十分に、ご理解いただくことはできないのです。「一番辛いことは、おしゃべりな私が自分の意見を発言できないことです。」兎に角、私の人生すべてにおいて、自分からしゃしゃり出たのは、「米国留学」のみでその他は全て「棚から牡丹餅」式に、アッラーからのお導きでした。「備えよ常に、しからば与えられん。」

* 頂いた業務は、精一杯尽くすつもりであり無理をしすぎないようにがんばっています。そして雑学に興味を持つこと—そうすると次のことが、自然と全連鎖されていくのです。世の中全て、必然です。宿命はあります。その全てをあるがままに受け入れ「日々精進」(大意のジハード)するよう務めています。





²ゴミ箱と花嫁のへや

質問：きちんとした、秩序ある環境での生活と精神的（心的）秩序の保持とは何か関連がありますか？

答え：人間が適切でバランスの取れた、規則正しい生活が続けるためにふさわしい決まりや基本を伝えるイスラームは整理整頓・規則正しさを重視します。順序に従いいくつかの規則にもとづいて行います。これらの規律ある配列（秩序）はあらゆる崇拝行為の中に浸透しており、それらは大切な部分となっています。ウドゥーをするときの順序も聖クルアーンによって明示された順に従って清めますし、アザーンやイカーマの言葉も決まった順に従ってとなえられます。また、タクビールをする前にルクウに移らないようにとか、ルクウをする前にサジダをしないようにとか礼拝行為にも決められた順序があります。また、礼拝のキラートのときに唱える章はクルアーンの順にふさわしい順番で唱えます。ハッジでサファーとマルワの間をサアイ（小走り）するときサファーからはじめマルワで終わりにしますし、アカバのジャムラで投石の後、初めに犠牲を捧げそれから剃髪します。イフラムを解くまでの崇拝行為はすべて順序正しく行われます。このような意味でも、配列（順序よさ）は大切なテーマであるといえます。

人間存在のための秩序という種子

万有（宇宙）を観てみると、ある種の調和、秩序を見出します。あらゆる被造物は構成部分が、それぞれに調和し統制されているように、万有も完璧な秩序と統制の中にあります。万有を完璧な秩序と統制に従って創られた至高なるアッラーは人間の本性に、整った調和の取れた魂を置き給いました。その本質において、大変整然とした完全な形で人間を創られました。人間が自らをよく観察してみれば、その本質に据え置かれている整った調和の取れた魂を発見することでしょう。ですから、彼の周囲（環境）も、彼自身に似せさせて、整った秩序ある環境を作る能力、その中で生活が続ける能力を与え給いました。

預言者様（彼の上に平安あれ）は「およそ子供はすべて本然の姿をもって生まれてこないものはない。」とおっしゃっています。つまり、善悪の満ちるこの世の生活において、至高なるアッラーは人間に善行の側へ向かう能力（良心）授け給いました。本然の姿を守り壊さない人間は誰でも善へむかい、アッラーを知性と心的理解力によって知ることができます。悪魔からの攻撃にさらされても負けることなく人間は誰でもイスラームに基づいて、生活できます。ここで、イスラームの意味するところは、調和、整然、秩序、平和です。イスラームは、彼の本然の姿を端的にあらわしています。

この点からみると、整理整頓を好み秩序を求める精神は、人間の特質のひとつといえます。そのような感覚や心はある人々の中ではすばやく育ちます。時折まだ7-8歳の子供がベットメイキングをし、散らかった衣類を集め、部屋をきれいに片付けるのを目にします。その子には本来持ち備えた「秩序を求める種子」の成長のためのふさわしい土台があります。その子は整理整頓を好む、秩序ある家庭で育ち、母からそれらを学

²昔々ユーフラテス川のほとりに、民衆から慕われたスルタンがいました。壊れたつぼで水を汲み、愛するスルタンに捧げた人がおりました。もともと水源そのものがスルタンの所有だったのですが、このこわれた壺では、なかなか水をすくい上げることができません。それでも、一生懸命水を汲もうとした貧しい人のお話が伝えられています。

「こわれた壺」はその話に因んでいます。M.F.ギュレン師が語っている言葉を文字にした文章の訳です。（HPからの転載）

び、整った秩序ある環境についての知識を養っていたのです。

結果として、見よう見まねで知らず知らず台所に散らかったお皿があればそれらを片付け、できる限り周りをきちんとしようとするわけです。

家庭での整理整頓ときまり

そうです、秩序を求める精神を育てるためには、その人の住む周りの環境がとても大切です。なぜならおよそ子供は彼自身が育った文化、環境に影響を受けるものだからです。時々、人の心のつくりに関して、環境がその人の秩序を求める心を形作るのに十分ではない場合があります。たとえ、そうであっても、少なくともしつけを受け本然の姿に基づいて体系付け育てること、自然に、やりやすくしてあげることが必要です。言い換えますと、人が整理整頓を好む種子を持つとしても、その感覚を、その人の状態、態度、行動に映し出すには、秩序ある環境で育つことが必要であるということです。

行儀作法のよい家族や家族集団の中で育つこと、規律正しい父親や祖父のいらっしゃる家庭で育つことがのぞましいです。子供の時からずっときちんとした生活をすることは、将来その子が担うであろうさまざまな義務や責任を不足なく行うことへとつながるため、とても大切なことです。家で、飲んだり、食べたり、寝たり起きたりすることが、日常生活の中で自然に行え、慣れ親しんだ決まりがあるなら、また年上の方々にも規律ある生活態度を見出すことができるなら、彼の人生は、家庭でもまた社会でも、よりきちんとした生活を続けることになるでしょう。さもなければ、多くの場合、家庭で身につけた行儀の悪さを社会へ持ち込み、いつも平和を壊すもととなります。適切な年頃に秩序と、行儀作法を身につけることができなかつた人々がいくら可能性があるといっても、一生涯、不健全な状態で生きていくことになりやすいのです。何度もこの行儀の悪さは彼らの魂や心に働きかけ精神的喜び（甘美さ）を失う原因となってしまうのです。

そもそも、人間はさまざまな知識をどんなに多く学ぼうと励んだとしても、乾物屋や喫茶店の周りでそれをするのでしたら、それらの知識、物理学、化学又は生物学の中には、その乾物屋や喫茶店からの風味や香り、色彩、図柄などに影響を受けてしまいます。人が神学校卒であったとしても、もし農業で生計を立てている場所で育ったなら、彼の世界の神学的雰囲気は、鋤やこん棒、くびきなどの道具に影響を受けます。つまり知識を得るには、人間の心に潜在的に備わった整然さ（秩序正しさ）について教えることができる、開かれた整った環境が必要となるということです。そのような整えられた環境を見出せないものたちが秩序ある人間にあることはたいへん困難です。

さらに、人間はカレンダーにのっとなって過ごすことに慣れ、自分自身をプログラムに基づいた生活に慣れさせるのならその人の身の回りの場所も整理整頓されているかどうかについても注意を払い行動します。たとえば毎日礼拝をする者、崇拝行為を怠らない者は崇拝行為における秩序正しさが身につけていることとなります。この秩序正しさは明らかに生活のほかの分野においても現れます。真の主との結びつきを健全に保つ者や、ドゥアーに割いた時を忠誠心と共に毎日一定時間、真の主を心から希求し人生を豊かにする者や、夜も昼も、決まった規則にしたがって過ごす者や、精神的・霊的生活をこのような秩序によってプログラムする者が、その人の残りの時間を無秩序に行き当たりばつりに生活することは考えられません。精神的・霊的生活において規則正しい人間は、表面に現れる生活においても自分自身に対して逆の行動を取ったり、だらしがない生活をしたりすることはありえません。その人々にとっては、崇拝行為においてすべてを滞りなく適切に行

うように、物的世界でも物や品々をきちんと片付け整理整頓し秩序ある調和の取れた生活をするのはむずかしいことではありません。

不精な者達よ！

トルコのあることわざに、「ライオンは寝る場所で明らかになる。」と伝えられています。そうですね。狐たちもまた彼らのうなり声で明らかになります。心的・霊的世界において秩序を保たない人間は、ほとんど物的世界でも秩序正しさや整理整頓になれることは不可能です。このような人々は他人から待ち望みます。周りの整頓は他の人がやればいい、彼の奴隷がやればいい、召使達がきれいに片付けられればいい、机を他の人が拭けばいい、部屋を誰かが来て掃除すればいい、さらには家の食器類まで他の人が洗って並べてくれればいいのというように、いつも他の人々が仕事をしてくれることを待っているのです。この怠け者の心は自分自身の手を決して使いたくありませんし、これっぽっちも仕事をしたいとは思いません。ほとんどの場合、この状態と行動の背後には多大な傲慢さと尊大さが隠れています。

自分をより重要で素晴らしい人間とみなしています。たとえば、熟読もせずに、目次を読んだだけで何かレポートを書くというような場合でも、自分は高められ、純化され、偉くなったように錯覚します。他の仕事は他の人々がやればよいと信じるようになり、彼の中に芽生えた自分は頭脳明晰だという考えにとらわれ、その種の仕事をせず尊大な態度を取ります。またそのため彼には秩序の感覚は身につかず、整理整頓の能力を育て、状態や行動に反映させることもできません。結果として、彼は寝ても起きても召使を探します。寝床から起きあがるとき「ああ、誰かいてくれればいいのになあ、そしてこの布団を片付けてくれればいいのに」という考えに満たされます。(どうかお許しを、)このような種類の人々になるとしたら、それは「怠け者」であることです。

しかし、体の器官すべてが祝福された、あの世のための行動を適切になさる神の使徒（彼の上に平安あれ）はその御手を水にひたし、家の扉や床を洗うことを進んでなさいました。家事をよくなさいました。アーイシャ様の伝えるところによれば、アッラーの使徒（彼の上に平安あれ）は家で普通の方のように振舞われました。ご自身の服のつぎあてをなさいましたし、靴の修繕もなさいました。家事も婦人達にもよく手伝いをなさいました。一方で彼は戦いにも参加なさいましたし、伝道の責任も果たされていらっしやいました。子供達のしつけにも心魂を注がれました。家事においても大変よく婦人達の手伝いをなさいました。たとえば家の中を掃いたり、洗った服を絞ったりなされました。どんなときでもアッラーの使徒はこれらの仕事をなさっていました。これらのことをなさっても決してそれらの行動を低い仕事とはごらんになりませんでした。それどころか、それらは本来備え持った素晴らしい特質の一つで、誰かが何か仕事をしているのをご覧になると、かならず手助けに走られました。たとえば、草原で食事を作るとき、彼も「私もまきを集めてかまどをたきますよ。」とおっしゃられました。マスジドを建設するときも、皆が日干し煉瓦を1つ運ぼうとするときは、彼は2つの日干し煉瓦を運ばれたものでした。これらのことをなさったときも彼のご高名は四方八方につたえられ、彼の教えについて、いろいろな地域で語りあわれました。当時、アッラーの使徒は（時間の）調整を適切になさり、彼は非常に重要な仕事（義務）を果たされる間に、これらの仕事をなさる機会も作られました。と同時に、これは使徒の魂に内在する整理整頓を好む気持ちと、秩序への熱い思いが外へ表れたことを意味します。

来月へつづく...



遠い未来についての言及

1. 死を望まないことと、この世に対する愛情

預言者は、我々の時代に非常に近い時期に起こる出来事についても、言及されている。その中の一つは、次のとおりである。

「共同体や民衆たちは、お互いにまるで食事に誘うかのように、あなた方の上に押し寄せようと誘い合い、あなた方の上に押し寄せてくるだろう」

ある者が尋ねた。

「我々が少数であるからですか？」 預言者は言われた。

「いや、その逆で、その時にはあなた方は多数になっているだろう。しかし、大水が引きずり込んだごみのようなのであるが。アッラーは敵の心から、あなた方に対する恐怖心を取り除かれ、そしてあなた方の心にはワフン（死を望まないこととこの世に対する愛情）を植えつけられるであろう」

またある者が尋ねた。

「預言者よ、ワフンとは何ですか」、預言者ムハンマドは答えられた。

「死を望まないことであり、この世に対する愛情である」³

この言及からまず、次のようなことが読み取れる。いつか、民衆が我々の上に押し寄せ、食卓で食事を分け合うかのように我々の財産を彼らのうちで分け合うような日が来るだろう。我々は食事を用意して彼らの前に差し出し、彼らは尽きることのない食欲で、彼らの前に置かれたものを平らげるだろう。これらはなぜ起こるのだろうか？ その時には、もはや我々は根のない木であるからである。さらには、大水に流されるごみのようなものであるからである。我々のさまざまな考え方やそのあり方の違いによって我々自身をお互いに駄目にしあつた結果、現世的な欲望と一緒に、我々を消化吸收してしまったのである。以前、彼らは我々を恐れていた。なぜなら、彼らが死を恐れる時我々は恐れず進んでいったし、現世的なものに重きを置いてはいなかったのである。しかしもはや我々は死から逃れようとし、この世に対する愛着も彼ら以上に持っている。彼らもそれに気づき、最も痛いところを攻めてくるのである。

一見したところでは十字軍の戦士を思い起こさせるこのハディースは、さらに深く読み込むと、もっと近い出来事についても言及しているのことがわかるのである。

ライフ・カラダー (Raif Karadag) は「石油の嵐」と言う本を書き、後にこの嵐を起こした者たちによつ

³ Abu Dawud, Malahim 5; Ibn Hanbal, Musnad 5/278

て殺害された。なぜならこの本には、19世紀および20世紀のトルコ民族の不運と虐待、そして侵略者についても記述があるからである。

オスマントルコ帝国（私はこれを帝国と呼ぶことに反対である。なぜならこの国家は帝国ではなかったからである。これは教友たちの時代の後に現れた、最もしっかりした国家である！）の上に、当時、何が起こったであろうか。全ての苦しみは、この国家の富を得るという目的のために与えられたのである。歴史を通して続けられた十字軍の最もひどい攻撃でさえ、この秘められた侵略に比べれば些細なものと言える。そう、皆互いに食卓に招き合うかのようによってたかって、一つの国家の富を分配してしまったのである。

聖ウスマーンと聖アリーは、当時の裏切り者によって殺され、預言者の時代が血に染められた。オスマントルコ帝国もまた彼らの子孫によって攻撃され、イスラーム世界は指導者を失ったのである。整えられ、飾り付けられた食卓に駆け寄るかのように、彼らは我々よってたかり、オスマントルコ帝国を破滅させてしまったのである。

十字軍は、ある時期は、明らかなある考えのもとで我々を攻撃したのであった。これは当時の純朴で馬鹿げたヨーロッパ人の攻撃であった。だまされた民衆は、彼らなりの考えでは、聖マリヤムの価値を守るためにやって来たのであった。しかし我々は、聖マリヤムは彼らが考え、信じているよりもなお、尊い存在であると見ているのである。我々は聖マリアが天国で預言者ムハンマドの妻になることを信じ、彼女を信者の母とみなしているのである⁴。そして、もし聖マリヤムが生きていたとしたら、彼女本人をも苦しめたであろう彼らのこの根拠のない迷信的な考えに対して、彼女の真実を守ろうとしていたのも、我々であったのである。

私が言いたかったことはこうである。ここで取り上げたこのハディースにおいて預言者ムハンマドが示されている、この考えのもたらしたものは、十字軍の攻撃ではなく、もっと近い時代に我々はその恐怖を味わい、しかもいまだに味わい続けている、西洋の共同体なのである。イスラーム世界は、いまだに、彼らの食卓であることから脱しきれないでいる。このように、十四世紀前に語られたことが、言葉どおりに実現しているのである。



⁴ Hindi, Kanz al-'Ummal 11/424

ご病気の方々へのメッセージ

第9の治療薬：創造主を認めた患い人よ。

病気の痛み、恐怖と心配が時には死の原因となります。死は見た目が大変恐ろしいので、死の原因となる病気も人々を怖がらせ、不安に陥れます。

まず始めに、約束された時間はすでに決定され、変えることができないことを、強く信じてください。重病人の枕もとで嘆く人々やまったく健康な人々は、ある意味で、もうすでに死んでいます。逆に、重い病気の人々は治療法を発見し、生き続けているわけです。

第二に、死は見た目ほど恐ろしくはありません。今まで数多くのリサーレ（手紙）の中で、神意と価値に満ち溢れるクルアーン（クルアーンニ・ハキーム）が放つ光によって、明白に、確実に（死について）説明してきましたが、イーマーンを持つ人々にとって死とは人生の義務の重荷から解放されることです。彼らにとって、この世は試練の場であり、そこで学び、訓練している崇拝行為の中断を（死は）意味しますし、あの世に去った99%の友人達や親戚達にであうための手段でもあります。死は永遠の故国、永遠の幸福な住処です。死はこの世の牢獄から楽園の庭への招待状です。無限の恵みをおつくりになったアッラー（ハールキ・ラフマーン）の気前のよさから彼に対する奉仕の見返りとしてその報酬を得る時でもあります。これが死というものの真相です。死は恐ろしいものとみなすべきではなく、むしろ恵みと幸せへの序章として捉えることが必要です。

死を恐れるアッラーの愛されるしもべたちの幾人かは、死そのものを恐れているわけではなく、おそらく、人生の義務を果たし続けることで、より多くの恵みを勝ち得ようという希望のために、（死ぬことを）恐れているのです。

そうです、イーマーンのある者にとって、死は恵みへの扉となり、アッラーを信じない者たちにとって死とは永遠の奈落です。

第10の治療薬：わけもなく心配する患い人よ。

あなたは病気が重いことを心配なさっていますね。その心配は病気を悪化させます。病気を軽くしたいとお望みなら、よけいな心配をなさらないよう心がけてみてください。つまり、病気の益や報奨そしてすぐよくなるとお考えください。心配を取り除き、病気の根を切り取ってください。

そうです。心配は病気というものを2種類に分けます。肉体的な病気の背後で、心配による精神的な病気が心に忍び寄ってくるのです。肉体的な病気は精神的病気に依存し、存続していくのです。従順で受けいれようとする態度で、病気の神意についてよく考えることで、もしその心配が消え去れば、肉体的な病気

の主な根は切り取られ、軽くなり、その一部は消えてなくなります。特に、起こりそうもないことを起こるかもしれないと心配することで、1ディルハム（エジプトでは1ディルハム=3.12グラム）ほどの体の病気は、時に10ディルハムまで増えてしまうことがあります。心配を取り除くことで、その病気の10のうち9は消えます。

心配が病気を悪化させるように、アッラーの神意を責め、アッラーの限りない恵みを批判し、無限の恵みを御創りになった御方（ハールキ・ラヒーム）に不平を述べたため、反対に平手打ちを食わされ、病気をさらに重くしてしまうというわけです。

そうです、やはり、感謝はアッラーからの恵みを増大させ、不平は病気や困難を増大させるわけですね。

心配、そのものも、実は病気の一つです。その治療薬は病気の神意を知ることです。神意やその益についてはもうすでにご存知ですね。その軟膏を心配という病気にぬれば、助かりますよ。

「嗚呼」の代わりに「おお」と「嗚呼悲しいかな！」の代わりに「全ての状態をアッラーに感謝します」と仰ってください。

...つづく



み使いの息子たち

み使いは三人の男児と四人の女児をもった。クアシムが長男で創教前に生まれたが、二歳のとき死んだ。アブドゥラは次男で創教後に生まれタイヤブまたはターヒルの名で呼ばれていたが、彼もまた幼少にして死んだ。彼の死に際してクライシュ族の者は喜んで言った。「ムハンマドは一子もなく、子孫は絶えるだろう。彼の名も一代かぎり、彼の詩と共に絶えるだろう。」

クルアーンのカウサル章を、アッラーが啓示したもうたのはこのときであった。「まことにわれは、なんじに潤沢を授けた。それでなんじの主を礼拝し、犠牲をささげよ、まことになんじを憎悪する者こそ(将来の希望から)断絶するであろう。」(108章 1-3節) 千四百年後の今日でも、み使いへの敬愛と親愛の念をもって繋がることを誇りとするものが、数億万人の多きに及んでいる。

彼の三男のイブラヒムは、ヒジュラ八年マディナーで生まれた最後の息子であった。彼の女奴隷マリアが産んだのである。彼の誕生日の第七日にみ使いはアキクア（生児の剃髪をして羊を犠牲に供える）祝をした。二頭の子羊が屠殺され、子供の頭はバヤジの手で剃られ、彼の髪と同じ目方の銀が慈善に供せられ、その髪は埋められた。み使いは言った。「私の祖先イブラヒムの名にちなんで私の息子に名をつけた。」

この子もわずかに十八ヶ月にしてヒジュラ十年三月十日に死んだ。彼の死に際しみ使いは言った、アッラーはパラダイスの庭に、イブラヒムを介抱するために、天の養育所を授けられた。

今年のラマダンも終わりました。今年も友達を招いたり、招かれたりして、よいラマダンを迎えられました。今年のラマダンは例年と比べて、ゆっくりとした時間をとることが難しかったのですが、それでもこの機会を逃すまいと、自分自身をリフレッシュさせようと思いました。

そんな時、友人からメールが届きました。一つのメールでは、私達の目、鼻、耳、口、がその機能を果たしていることに感謝すべきだという内容のものでした。目について言えば、私達の目は毎日何を見るのでしょうか？朝目覚めてから、眠るために目をつむるまで実に様々なものを見ます。その目に映るのは神様の創造物そのものです。朝日が昇るのを見て、美しい花や木を見ます。そして様々な虫や動物も見ます。そしてそのすばらしい記憶を残してくれます。これらの創造物を見ると、神様のすばらしさを感じます。規則正しく創られたその創造物は本当にすばらしいものです。また、目が見えるおかげで、危険なものから自分を守ることができますし、大切な人を視覚で感じることができます。目で見たもので、感激し、また目で見たもので、悲しみます。このように目が見えることで実にたくさんのお慈悲を頂いています。

また別の友人からメールが届きました。その内容は、「私達は恥を感じている・・・」というものでした。人間は完璧なものではありませんが、それぞれ努力してよりよい人間になる為に生きています。私達は、感謝することを忘れ、そして恥じることをも忘れてるように感じます。嫉妬をすること、寛容でないこと、寛大でないこと、善行をすることにちゅうちょすること、施しを出し惜しみすること・・・どうして私達はほかの人々の痛みが分からないのでしょうか？どうして私達は傷ついた人を見て胸を痛めることができないのでしょうか？どうして私達はお慈悲を頂いて、感謝することを忘れるのでしょうか？どうして私達は自分の犯した悪い行い、恥じるべき行いに対して、胸を痛めることができないのでしょうか？心が麻痺しているようです。心はもっと繊細に感じるべきです。毎日の仕事、勉強、社会の営み、暮らしのなかで大切なものを失っているように感じます。

どうか私達の行いが許されますように。そしてイスラームを今に残して私達に伝えた預言者様、そして教友達にたくさんの報酬がありますように。



「シザーハンズ」 Edward Scissorhands

皆様、ラマダーンが終わり、いかがお過ごしでしょうか。ラマダーン中は自分の内面を見つめたり、普段会わないような人たちと親交を深めたり、交遊を広めたりしてお過ごしになったと思います。人の出会いというのは、言うまでもなく様々なもので、会ってすぐにその人の内面が推し量れるようになるには限りません。外見に左右されたり、行動に左右されたり、些細な事が気になったり、人に対する評価はくるくると変わってしまうものです（私だけでしょうか）。ちょっとしたことで「苦手」とか「いい人かも」と判断してはいけないな、もっと心を広く持たないと、きちんとした判断はできないぞ、と自分に言い聞かせはするのですが、とりあえず全部を受け入れてよく見るというのは、なかなかむずかしいことです。

「シザーハンズ」の主人公、エドワード・シザーハンズは、人から誤解され続けた人の一人です。

ある雪の降る日、祖母が孫娘に昔話をはじめた。

……エドワードは、山の上に住む発明家が造り出した人造人間。手の代わりにはさみを取り付けられており、もう少しで人間と同じ手に変えてもらえるはずだった。だが、その前に発明家は死んでしまう。残されたエドワードを化粧品店の訪問販売をするペグを見つけ、気に入って家に連れ帰る。高校生の娘キムは、最初は彼の事を嫌がっているが、だんだんその純粋な心に彼女の周りの人にはないものを感じ、心ひかれていく。最初は何をするにも手の代わりにのはさみがじゃまで苦労していたエドワードだが、あるとき庭木を美しい動物の形にし、犬の毛を刈り、奥様方の髪型もモダンにカット。一躍近所の人気者になる。

キムのボーイフレンド、ジムはエドワードが誰にでもやさしく、キムがいつも彼をかばうため彼の事を快く思わず街から追い出そうとする。様々な事件の最後に、ジムの車に轢かれそうになったキムの弟を助けようとしたエドワードは、あやまって彼を傷つけてしまう。その事から「やっぱりアイツは恐ろしいやつだった!」「街からたたき出さねば!」「いや、殺してしまわなければ!!」と街中が団結しエドワードを殺しに山の上の屋敷に追いかけにいく……。

ストーリーだけ見ると、あまり良い話ではないように思います（人間を造るのがそもそもいけないのでは、というむきもあると思いますが、そこは大目に見てください）。私がこの話をみて、一番怖かったところは街の人たちのエドワードに対する意見があつという間に「いい人」から「極悪人」に変わる所です。エドワードは、両手のはさみというだけでなく、見た目がパンク・ロッカーのようでちょっと怖いですから、最初は怖がられます。ですが、みんなに心を開くうちに、その才能がみとめられていきます。が、はさみでちょっと人を傷つけてしまっただけで、悪気があったわけでもなく、人助けのためであったとしても、人々は自分たちの「見たいもの」「見えるべきもの」しか見ずに判断をくだしてしまいます。しかも、個人個人が彼を攻撃するならまだしも、街全体があつという間に団結し、一つの意見へと突き動かされていきます。個人ではできないこと、やらないだろうことでも、集団になるとどんどんそっちへ動いていく。これは、本当にぞっとする光景です。ですが、自分がそうならないとも限らないわけです。何が正しく（良く）、何が正しくない（悪い）のかは置いておいて、人間関係にかぎらず人は自分で様々な事の裏表、中身と外見などに関して判断できなければならぬ、と思いました。人に流されて、後で「私はもともとそう

じゃないと思っていた」というのは言い訳にしかならないですね。

逆に、なんて素敵なんだろうと思ったのは、何も知らない無垢なエドワードと、それを守ろうとするキム、そして天真爛漫にエドワードをかわいがるペグの姿でした。ですが、よく考えてみると街ではやっていけないであろうエドワードを街に引っ張りおろしてきたのはペグで、その事によってエドワードの人(?)生は大きく変わるわけです。彼が街に来なければ街の人たちの生活も変わらず、エドワードも困惑せずに生きていけたわけです。しかし、そう考える気持ちが出てきてもなお、エドワードは街に来て、人々から多少の期間でもあれ暖かい愛情をそそがれて良かったんだろうという気持ちも消えません。エドワードはキムによって愛を知ることによって、それを心に残す事により残りの人生を意味あるもの、発明者を亡くした事を悲しむだけの人生ではないものにする事ができたのだと思うのです。街から帰った後、彼は山の上の荒れ果てた屋敷を素敵なお庭園に仕上げます。さらに、氷で彫刻を作っては、街にきらきらときれいな雪を降らせるのでした。この事は、彼のはさみをもってしてしかなしえない事です。

この映画は、人と人との関係を考えさせますが、「人には欠点もあるが、それによって何か新しいもの、いいもの、人を幸せにするものを生み出す事もできる」というメッセージも持っています(もちろん、もっとたくさんの色々なものを持っていますが)。ティム・バートン監督の独特の世界観を、惜しみなく楽しめる作品でもあります。

だんだん寒くなっていくこの季節、今年は雪が降るかな?と思う地域の方も、もう雪が降ってます、という地域の方も、とっても暖かな気持ちになれる「雪の降る日に語られたお話」に耳を傾けてみてはいかがでしょうか。

『シザーハンズ』 1990年 アメリカ 105分

監督:ティム・バートン 音楽:ダニー・エルフマン

出演:ジョニー・デップ(エドワード) / ウィノナ・ライダー(キム) / ダイアン・ウィースト(ペグ) ほか





遊離基（フリーラジカル）

近年、科学界に新しい理論が生じている。この理論は、細胞のメカニズムに関わる全ての分野に投げかけられたものだ。こういった、科学の理論の変化が常に起こるという事実は、私たちがこの世界のことをどれほど知っているのだろうか、ということをも問わせるものとなる。

最も古い科学分野の一つである医学においては、理論の変化が特に多く起こってきた。アリストテレスは、彼の師であるプラトーンが「脳は知覚を司るもの」と考えたのに対し、「脳は血液を冷やすために使われる」と考えだした。今日、科学者はプラトーンの「古いほうの」理論を受け入れている。1800年代、脳科学の舞台は骨相学へと移り、人間の性格が頭蓋骨の隆起や凹みに反映されているとされた。今日これは、無意味なものだとして退けられている。しかし留意すべきことは、その当時においては真剣に考察された「科学」だったということだ。ポール・プロカによってこの「科学」が論破されたのは1861年になってからで、彼は言語を司る脳の領域「プロカ野」で知られる。しかし骨相学は、その支持者、実践者を20世紀初頭まで失わずにいた。現在の、思考や感情に関する理論、心理学、精神医学のうち多くの部分は、骨相学で行なわれていた観察よりわずかに信頼できるものにすぎない。使われているツール（CTスキャン、MRIなど）が高価になったものの、基本的なアプローチは骨相学と同等のものともいえる。

近年、生物医学の分野で、ある革命が生じた。「遊離基（フリーラジカル）」である。これらのうち最もよく知られるのが一酸化窒素（NO）である。

一酸化窒素は、有害な化学物質で、車からも排出される。これは長らく、人類にとって最も有害なガスであると見なされてきた。しかし、1980年代、科学者たちは、多くの細胞もまた、一酸化窒素を作り出すことを発見した。多くの論文が、このテーマに関する研究において発表された。これは現在、エイズやアルツハイマー、関節炎などよりもよりポピュラーな研究トピックとなっているのだ。一酸化窒素は、血管拡張作用を有するものであり、また細胞間のシグナルを伝達するという革命的な科学的解明が行なわれたのである。

肉体によって微量な量でリリースされると、それは細胞から細胞まで生化学的シグナルを伝達することができる。血液循環において、一酸化窒素は、血管内皮にはたらきかけ、周囲の筋肉を弛緩させ、血流量を調整する。神経系においては、一酸化窒素は記憶形成にも関与していると見られる。免疫システムでは、それは病原菌などの異物や腫瘍細胞を死滅させる。医学者は多くのコンディションにおける一酸化窒素の重要性を把握している。高血圧だけではなく、卒中、敗血症、動脈硬化、さらには勃起障害においてまで、その重要性は高い。

伝統的な細胞学の観点からみた一酸化窒素のあり方が、議論を醸している。まず第一に、一酸化窒素は、化学者たちが「遊離基」と呼ぶ存在である。これは、一個もしくはそれ以上の不対電子を持つこと

を意味する。そしてそれ以上に、これは反応性が高く、他の組織と異なり、非常に不安定である。酸素に触れると直ちに酸化され、二酸化窒素となる。体の他の神経伝達物質の大部分は、アミノ酸やカテコールアミン、ペプチドなどの分子と比較すれば、もっと複雑である。神経伝達物質はシナプス前細胞の細胞体で合成され、細胞輸送によって運ばれ、前シナプス終末にあるシナプス小胞に貯蔵される。前シナプス終末に活動電位が到達すると神経伝達物質はシナプス間隙に放出される。拡散によって広がり、後シナプス細胞の細胞膜上にある受容体と結びついて活性化される。伝統的な例が、カテコールアミンの一つアドレナリンと受容体である。これはよく、鍵と鍵穴の関係に例えられる。

一酸化窒素のメカニズムはこれとは完全に異なる。一酸化窒素は細胞内の可溶性グアニル酸シクラーゼを活性化して環状グアノシンーリン酸 (cGMP) を合成させる。cGMP が、筋肉の緊張緩和から血液凝固の減速に至るまでの作用を起こすのである。

一酸化窒素の重要性は、最初、血圧の調整において発見された。周囲の筋肉を弛緩させ、血管を拡張させることが発見されたのだ。血管は、筋肉と、弾性のある繊維質の組織の層で形成され、血管内皮を持つ。血管内皮は一酸化窒素を作り出し、これが周囲の筋肉層に働きかける。このプロセスは、血流の物理的効果によって調節されている。血液が血管内皮細胞上でラッシュ状態になった時、それはわずかなゆがみをもたらす。このゆがみが、一酸化窒素の形成をもたらすのだ。あたかも、血圧が、血管によって、その場で、かつ効果的に調整されているかのように見える。以前の理論では、血圧は神経システムの中枢からの伝達によって調整されている、とされていた。中枢からの調整と、その場に置ける調整のバランスは、まだよく解明されていない。長年、医者たちは、血圧の調整のため、伝達系に効果を及ぼす薬を用いてきた。例えば、 β レセプタをブロックする薬などである。しかし、様々な一酸化窒素に関する実験の結果は、神経系が血圧の調整にあたる影響が比較的小さいことを示すものとなった。英国の薬理学者で、ウイリアム・ハーベイ研究所のサー・ジョン・ベインは、「血管その場における血管収縮神経と、中枢からの血管収縮神経。この二つの大きな力の間には、継続的なバランスが存在するに違いない。」と述べている。

遊離基は現在、生物学的研究の全体に影響を及ぼしている。しかし、ほんの数年前までは、それらが人体の調和において何らかの役割をもつということなど、思いもよらなかったのだ。遊離基は、いわゆる「しっかり確立された」人間の理論の誤りを指摘するものとなった。理論は常に変化し、時には根本的に覆される。この事実は、「あの理論はいったい何だったのだろう。あれを基にして行われてきた様々な事柄は何だったんだろう。」という問いを投げかける。

科学的研究を熱心に行なうことは、私たちにある事実を納得させる。人類は、この世界について非常に限られた知識しか持っておらず、私たちが行なってきた作業の大部分は、既存の現象に名前をつけただけに過ぎないのだ、ということである。





「冬物語」の観劇

私の心の中には、いつかやってみたいことのリストが、言うなれば「あこがれリスト」がある。日本以外の場所で演劇を見ることも、その中の項目にある。以前、上海で「上海雑技団」の公演を観たことがあるが、その時の感動は相当のものだった。そして今回とうとう、イギリスで演劇を観ることが叶うことになった。

友人は、私がせっかくイギリスに来たのだからと、いろいろと心配りをしてくれた。演劇が大好きな私のために、観劇のスケジュールを組んでくれたのもそのひとつだ。友人が調べてくれた劇は、なんとシェイクスピアだった。「冬物語」というお話は知らなかったけれど、彼の故郷ストラトフォード・アポン・エイボンが近くにあるオクスフォードで、シェイクスピアのお芝居が観られるということだけで大興奮だった。珍しいテント (Mirror Tents /spiegel tents) の円形劇場で行われるということもあり、すぐそれに決めた。友人が電話で予約をしてくれた。そして、インターネットを使って「冬物語」のお話の予習をしておいた。

テントはオクスフォードのはずれにあった。当日はバスを2台乗り継ぎ、さらに歩いてようやくたどり着いた。初めて行くところだったので、バスの中でも、道でも、人にいろいろと尋ねた。だんだん時間が迫り、バス停とバス停の間をダッシュしたりして、少しハードだったが、ちょっとした小旅行のようで楽しかった。バスの中で、子どもが決して座らず、空いた席を見つけると他の人に教えてまわっていた光景が印象的だった。

結局、開演時間より少し遅れて到着した。見知らぬ場所で、「開演時間に遅れる」というイレギュラーなことをしてしまい、自分でも「どうになってしまうだろう？」と必要以上に心配がこみあげてきた。ところが、逆にラッキーだった。なんと、もう始まっているからと、チケットも確認されず、予約した席ではない、ものすごく前の方の、まさしく特等席に案内してもらったのだ。そこは舞台もすぐその、テーブル席で、ゆったり見ることができ、幕間には軽くお食事を頂くこともできる席だった。もちろん、体験できることは全部やってみようという主義なので、私も嬉々として頂いた。舞台を見ながら飲み物をすすっていると、自分も登場人物になったような気がした。

ミラーテントと呼ばれるその円形劇場は、世界に11個しか現存していない珍しいもので、なんと百年も前に作られたものだそうだ。11個それぞれに大きさも仕様も違って、私たちが見たものは「Idolize」として知られているという。この話は、幕間に前の観客席の人と、パンフレットを見ながらお話しして知ったことだ。なぜミラーテントというかと言えば、うまく表現できないが、中にとにかくたくさんの鏡があり、宝箱のようなのだ。鏡やその他も含め、劇場自体がとても独特で、それ自体が一つの劇のようだった。

円形の舞台の上には、登場人物を象った人形が吊ってあり、それらは演出の面でうまく使われていた。演じるのは、人数としてはわりとこじんまりした劇団だった。一人何役もこなし、さらには楽器の演奏も全部自分たちでやってのけていたが、それが逆に良い雰囲気を出していた。何を言っているのかはさっぱり分からなかった。音としては入ってくるのだが、頭の中で意味として全く結像してくれないのだ。予習をして行って本当に良かった。それでも、自分のできる範囲で十分楽しめたと思う。

終演後、外に出ると雨が上がっていた。劇の最中に降っていたようだ。最後にミラーテントの外観を鑑賞してから帰った。

おいのり会に出る

オクスフォードには、街の中心部にイスラミックセンターという建物があって、その中で自由にお祈りができるようになっていた。これはかなり便利だった。買い物に来た途中でも、大学で講義を受けに来た途中でも、図書館に来た途中でも、手軽にすぐそこへ行けるのだ。文化センターの役割もあるそうで、パンフレットなどをもらった。

それとは別に、友人のムスリムの友人たちに会う機会もあった。週に一度、おいのり会と称して、みんなで集まり、話し合ったり、お祈りをしたりするという。そこに参加させてもらうために、まずその参加者の方のお宅におじゃまして、車で乗せていってもらうことになった。

友人を含め、留学している人のお宅を見せてもらったことは何度かあったが、イギリスに実際に住んでいる人のお宅は、その時が初めてだった。日本でも最近ガーデニングなどというが、まさしく本場イギリスの「お庭」があった。私の憧れの「暖炉」もあった。そういう「物」にも出会えて嬉しかったが、なんと言っても嬉しかったのは、イギリスのムスリマに会えたことだった。その方は、多分、1分間に60回くらい言っているのではないかと思うくらい、「Al hamdillillah」を連発して話す方だった。娘さんは歌がとてもうまくて、車の中で歌ってくれた。ヒジャーブを外せば年頃の、いまどきの娘さんなのだろうが、ヒジャーブをつけた姿はまさしくムスリマだった。

おいのり会に出発する前に、そこのお宅で晩御飯をいただくことになった。トルコでおなじみの「マクルーベ」だった。ご飯やお肉やお野菜を、大皿にケーキのようにかためて盛り付けるのだ。ご近所にいらっしゃる、もう一人の、おいのり会の参加者の方も呼んで、みんなでいただいた。とても楽しかった。

おいのり会で印象に残ったのは、おいのり会そのものも当然だが、一番は「おやつ」の量だった。そんなことを書くなんて、食い意地が張りすぎのようだが、本当にすごかったのだ。ケーキの上にアイスクリームが載っていて、それと紅茶を頂いたのだが、全部の量の多いこと、とても食べきれないと思ったが食べきれってしまったのがまた驚きだった。後片付けの時、台所に入らせてもらったが、そこもすべてがビックサイズだった。ただでさえ小柄な私は、こびとになった気がした。

帰りの車の中で、娘さんが歌ってくれた歌はずっと覚えている。そしてみんなで、イギリスの各地にある「訛り」についての話で盛り上がった。最後は英語だけじゃなくて、ドイツ語や他の言葉の話も混じってきて、おもしろくて楽しくて、笑いが止まらなかった。

私はときおり、日本で穆斯林としていることに、妙な孤独感をおぼえることがあった。でも不思議なことに、イギリスでイギリスの穆斯林に会えた時、何かストンと落ち着くものがあった。イギリスにはイギリスの、日本には日本の穆斯林がいる、みんなそうやっている、いろいろな苦労や楽しさもひっくるめて、それが普通なんだなあと思ったのだ。

オクスフォードが晴れた日

ある日、午前中に友人の用事が終わったら、昼からオクスフォードの「観光」をしよう、ということになった。その時点ですでに、何度も図書館へ行ったり、書店に入り浸ったり、水曜の朝市やスーパー Sainsbury や C O ・ O P で日用品の買出しをしたり、郵便局へ行ったり、カフェに入ったりとすっかり街に馴染んだ感覚だったが、一度「観光」もしてみたいと思った。前夜、イギリスに行ったら一度は食べてみたかった「フィッシュ アンド チップス」を友人と作っていた。その残った魚のフライを使い、サンドウィッチを作って自転車で出発した。途中、すっかりお馴染みの Sainsbury で紙パックの「ブラックカラマジューズ」を買い、オクスフォードのカレッジ群の中へと向かった。

その日は、本当に本当に珍しく、晴れた。それまで、雪やら小雨やら霧雨やら、ありとあらゆる天気を味わってきたが、一日中すっきりと晴れたのは滞在中でこの日だけだったと思う。イギリス人は天気の話が好きというが、「そりゃ好きになるよな！」と納得できたほどだ。たまに晴れたとなると、嬉しくて嬉しくてつい話したくなるのだ。

実際私も、オクスフォード大学の博物館の近くで、ベンチに座ってサンドウィッチを食べた時に、通りがかりの人と「晴れましたねえ」「やっとなですねえ」というような会話を交わした。サンドウィッチを食べていて、ふと気がついた。「そうだ、私、イギリスに来たら、公園のベンチに座ってサンドウィッチを食べてみたかったです！それが今叶いました！」思わず友人に向かってそう言った。

「公園のベンチに座ってサンドウィッチを食べる」などと言うことは、日本の常識で考えると簡単に実現できるありきたりのことだ。でも、そうではなかった。そこには暗黙の内に、天気が「晴れ」という条件がついているのだ。私は、「Mr. BEAN」というコメディで、公園でサンドウィッチを食べるシーンを見たことがある。主人公ともう一人、合計大人が二人、嬉々として食べるのだ。何をそんなに嬉しそうなのかと思っていたが、「そりゃ嬉しくなるよな！」と思った。

きらきら、ぼかぼかした太陽の光の中、サンドウィッチを食べ終わると、しばし友人と別れた。友人が大学の用事をしている間、私は博物館に行った。はっきりとは分からなかったが、物理かその辺り、とにかく科学関係の博物館だった。

「アインシュタインが講義した黒板があるよ」と友人に言われていたので、まずそれを探した。下の階の、奥まったところにその黒板があった。「 $D = 1/C \quad 1/L \quad d l / d t \cdot \cdot \cdot$ 」とまだまだ式が続いていた。アインシュタインが実際に書いた式を写すというのは夢みたいなことだったが、とにかくやってみたかったのでやった。今私の手元にあるメモには、その写した式のすぐ下に「relativity」と書いてあって、説明が走り書きされている。

博物館には他にも、古い望遠鏡など、由緒ありそうなものがたくさん展示してあった。オクスフォードというと、今では「文系」というイメージがあるが、この博物館を見た限りでは理系の伝統も深そうだと思った。

そうこうしているうちに友人とおちあう時間が来た。無事合流できると、「クライストチャーチ・カレッジ」に向かった。映画「ハリー・ポッター」シリーズの「大広間 (=Hall)」の撮影で有名でもあり、カレッジミュージアムでお土産が買えることもあり、そしてその近くの「セントメアリー教会」の塔が、オクスフォードで一番高いところということもあり、ここを観光しようということになったのだ。

途中で、「アリスの家」という『不思議の国のアリス』専門店があった。どうしてそんなものがあつたのかというのは、後で分かった。とてもかわいい店内だった。品物もお土産にちょうど良い感じだったので、少し選んで購入した。

クライストチャーチの近くで写真を撮ってもらった。今回の旅行で唯一、自分の姿がある写真になった。初春の芝生の緑が鮮やかで、背景に歴史的な建物と、アーモンドの花々がきれいに映っている。友人の話だと、この近くにいつも牛がいるという。友人のイメージだと、「クライストチャーチ・カレッジ=牛がいる」だそうだった。

カレッジの入り口の直前で、小石を拾った。小石を拾った理由は、私の大学入試の時にさかのぼる。オープンキャンパスに参加した時、きっと合格して、必ずここへ戻って来ようという気持ちを込めて、小石を拾って帰った。「意志」と「石」をひっかけていることもある。めでたく合格して、その石は元のところへ返した。その後休学することになった時、また小石を拾って帰った。復学し、また石を戻した時の思いは格別だった。

私は、オクスフォードとは決めていないが、イギリスの大学院で勉強したいという目標がある。その、「いつかイギリスへ戻ってくる」意志を込めて、クライストチャーチ・カレッジの小石を拾ったのだ。

カレッジへは、在学生のゲストという形で、無料で入場することができた。芝生の広場を目にしたときも、「大広間」へ向かう階段でも、デジャヴュを何度も感じた。それはそうだった、映画で観たことがあったからだ。

実際の「大広間」は学生のための食堂だった。「本日のメニュー」と書いたボードがあつて、「ポーチド サーモン」とか、「チキンとスイートコーンのパイ」などとおいしそうなメニューが並んでいた。また、大広間の中の高い壁には、数え切れないほどの肖像画が並んでいた。オクスフォード大学の長い歴史の中での教授たちの姿だった。その中に、『不思議の国のアリス』の作者ルイス・キャロルもいた。ただし、「ルイス・キャロル」はペンネームだったので、最初は全然分からなかった。ガイドさんが教えてくれてやっと分かった。彼は物語の世界から抜け出してきたような、おしゃれな帽子を被っていた。大広間にある暖炉には、とても変わった、首の長い木の像が両脇にあるのだが、それを見てキャロルは物語のインスピレーションを得たという。またアリスちゃんは、実際にいた彼の娘だそうで、「キャロルがここで食事を取っている時、アリスがここから入ってきて、出て行ったんですよ」などと教えてもらった。

今と昔、物語と現実の世界が入り混じるような複雑な空間を出ると、「オクスフォードで一番高いところ」へ上るために、セントメアリー教会へ向かった。行くとすぐに塔に登らせてもらえた。荷物を一部置いていくように言われたのだが、それもそのはず、上までは結構な道のりで、両手両足を使う必要がある場所もあったのだ。ぐるぐるぐるぐる螺旋階段を登り、はしごみたいなところも登り、どこまで行くのだろうと思ったところで、とうとう頂上に着いた。

すかっと、見事に晴れた青空が広がっていた。風が最高に心地よかった。最後に一枚残ったフィルムで、塔の上からみたオクスフォードの写真を撮った。街を背景に、クライストチャーチのどっしりとした建物と、日時計と、芝生と、そして青空が映っている。こんな景色はなかなかお目にかかれないであろう、まさしく「オクスフォードが晴れた日」になった。結局、旅行前に夢見た、公園でサンドウィッチを食べることも、小石を拾うことも、一番高いところに上ることも、そして思ってもみなかったことも全部叶ったのだ。

日本へ帰る日が来た。午前中、最後の買い物をした。行き慣れた書店では、劇を観た「冬物語」の本や、心理学の辞典などを買った。オクスファムでもお土産を買ったし、Boswells といういつも前を通っていたおしゃれな日用品屋さんでも、木のおたまや同時に4つの時間が計れるタイマーなどを買った。これまたすっかりお馴染み Sainsbury では、イギリスに来て大好きになった「フィンガー」というお菓子をまとめ買った。

最後に、本当にお世話になった友人へ、図書カードをプレゼントしたのだが、お二人からも逆にたくさんプレゼントをいただいてしまった。感謝感謝の中、とうとう出発の時間が来た。初春というのに、夕方になるとかなり冷えてきて、凍えるようだったことをよくおぼえている。

ヒースロー空港行きのバスが来て、お二人とお別れになった。世界で一番古いという喫茶店の前を通り、オクスフォードの街並みの中、バスは進んでいった。最後という感じが全くしなかった。いつかまたここへ来られるような気がした。

おわり

筆者より

これで、「カレッジの小石〜ちいさなわたしの、オクスフォード旅行記」のお話は終わりです。読んで下さった皆さん、本当にありがとうございました。「読んでいるよ」「おもしろかったよ」という励ましのお言葉が何よりの支えとなり、ようやく最終回にこぎつけることができました。これからの作品にも、応援よろしくをお願いします！





私が、何年も前に読んで、非常に感動した一節がある。定められた礼拝の時について書かれた文章である。

「アスル、午後。これは秋のようであり、老年期のようであり、至福の時代として知られている最後の預言者の時代のものである。そして、それらの中に存在する、慈悲深い神の行為を思い出させる。マグレブ、日没の時。秋の終わりにおける多くの創造物の消失、人の死、復活の始まりにおけるこの世の破壊を思い起こさせることによって、心に、神の栄光と、神への屈服を思い起こさせ、そして人は不注意なまどろみから目覚める。」

この前後にはそれぞれ、その前後の礼拝に関する記述がある。「ファジュール、早朝。日が昇るまでのこの時間は、春の始まり、母の胎内での受胎の瞬間、天と地の創造の最初の六日間に似ていて、それらを心に思い起こさせる。それは、それらの中に存在している神の偉業を呼び起こす。ズフル、正午を過ぎた時。これは、真夏、若さのすばらしさに似ていて、それらを示している。この世の歴史においては、人間の創造の時期であるといえる。そして、それらが含んでいる慈悲と恵みの顕現を心に訴える。」

「イシャー、たそがれの時。黒い覆いによって昼の世界の全てを覆い隠す闇の世界を思い起こさせることによって、そして冬が、その白い礼服によって、地上の死者たちを隠し、死んでいったものの残した業績までも、忘却のベールに覆われることを思い起こさせることによって、そして、試練のステージであるこの世界が沈黙のうちに閉じられていくことを思い起こさせることによって、力強く、輝かしく、全てを支配する存在を宣言する。そして再び朝。これは、復活の朝を思い起こさせる。夜の後の朝が、妥当で、必要な、そして確かなものであるなら、この世とあの世の間の世界に続く復活の朝と春は、それと同様の存在なのだ。」

この文をはじめて読んだ頃、私はイスタンブールで初めてあの秋を迎えていた。当時、何気なく行って見た「イスタンブール考古学博物館」に惹かれ、何度か通った。ヒッタイトの戦車の浮き彫り、粘土板から始まり、ローマの石棺、ミイラなど、この土地の歴史を感じさせるものが数多くあり、近くにあったトプカプ宮殿のような華やかさはないかわりに、人をひきつける重みがあったと思う。友人と行くこともあったが、たいていは一人で通った。

考古学博物館で有名なものは、アレクサンダーの石棺や、「嘆き悲しむ女たち」のレリーフの入った石棺だった。それらには圧倒されるものがあったが、当時の私は博物館2階の、小さな大理石の浮き彫りの一つに惹かれていた。数人の幼児が並んで立っている姿が彫られていて、ローマ時代のものだという事だった。繊細な浮き彫りで、子供たちは皆、穏やかな表情だった。しかし笑っているのではなく、何かを見つめているような、悲しい出来事を静かに受け入れているような、どこかひたむきさや悲しさを感じさせる表情だった。この浮き彫りの子供たちにはモデルはいるのだろうか、どういう場面が描かれているのだ

2005年11月 やすらぎ

ろうか、そもそもこの浮き彫りはどういう意図で作られたのだろうか、と興味も尽きず、博物館に行くたびにこの浮き彫りを見に行った。割と人の多い1階と比べ、2階はほとんど人の姿もなく、静まりかえっていて、子供たちもいつ行っても静かに並んで立っていた。

博物館の外は一面の黄色い落ち葉で、空気が乾燥しているため、日本の落ち葉のように下のほうから湿ってぐちょぐちょになるということもなく、ぱりっと乾燥したまま何層にも重なって積もっていた。そういう時に、前述の一節がよく頭に浮かんだ。「アスル、午後。これは秋のようであり、老年期のようであり、至福の時代として知られている最後の預言者の時代のものである。そして、それらの中に存在する、慈悲深い神の行為を思い出させる。」当時の私は、まだ20代に入ったばかりだったが、ある意味では私の人生は秋を迎えたといえるかな、と思っていた。夏が、「この世の歴史においては、人間の創造の時期であるといえる」と表現されていることを考えるなら、入信以前の人生が夏であり、預言者と創造主を知ることができて以来が秋ということもできる。秋は恵みの季節であり、「祭りのあと」を感じさせる落ち着きと静けさの季節でもある。そしてあの大理石の子供たちもまた、秋と、秋の終わりを思い起こさせた。繊細に施された浮き彫りは、それが経てきた数千年という時間を通し、この浮き彫りの周囲、あるいは浮き彫りが埋まっていた上の土地での様々な栄枯盛衰、「おごれる者久しからず」というような事実、人間のはかなさと共に、人類がずっと抱いてきたであろう創造主への思慕、神への模索を思い起こさせた。

あの頃から10年近くが過ぎ、私は母にもなり、また祖父や祖母を失った。祖父母の死に思うことは尽きないが、子供たちとの生活から教わることも限りない。そして今でも秋には時々、あの大理石の子供たちと、一面が落ち葉のじゅうたんに覆われた、考古学博物館の前の道を思い出す。

樋口めぐみ



購読価格（郵送費込み）バックナンバーは、1部200円（日本以外は1部250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

三井住友銀行 店番号：005（春日部） 口座番号：7315959 口座名義：Yasuragi
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部